

容体が急変した廣尾すみゑさんの周囲に家族や友人、医師、看護師が集まった。いずれも6月18日午後、小野市内

家に帰ろうよ。



1

最期、家族みんなで

私たちは、どこで死を迎えるのだろうか。かつては自宅で亡くなる人が大半だったが、今は病院や施設という人が8割を超す。シリーズ第一部の取材で訪れた介護施設やホームホスピスで、私たちは「家に帰りたい」という声を少なからず聞いた。それぞれ事情はあるし、家族の考え方も違う。住み慣れたわが家で人生をしまうことは難しいのだろうか。「いのちをめぐる物語」第二部は、自宅での最期を見つめる。最初に、病院から家に帰ることを選んだ小野市の女性と家族の物語を届けたい。

日差しが心地いい日だった。梅雨入り前の6月18日、私たちは小野市に住む廣尾すみゑさん(68)と会う約束をしていた。向かった先は、市北部の建具

今年2月に末期の大腸がんが分かり、入院。2度の手術をしたが、がんは全身をむしばんでいた。長くは生きられない。すみゑさんは自宅に帰りたいと思いつつも、「帰ったら、若いものに迷惑掛ける。最期は病院で」と何度も口にしていった。

5月の終わり、長男辰也さん(45)の妻、理絵さん(44)がこう切り出した。

「もう家に帰ろうよ」
そして6月10日、わが家に戻ってきた。

ベッドの脇で取材をする記者。自身の人生について聞くと、すみゑさんは「楽しかった」と答えた(廣尾理絵さん提供)

この春以降、私たちは家での



容体急変「孫帰るまで待って」

みとりを支える医師や看護師に取材してきた。そのうちの一人から紹介されたのが、すみゑさんだった。

6月18日は初めての訪問だった。午後1時前、「こんにちは」と玄関で声を掛け、靴を脱いで上がった直後、ただならぬ空気に気づいた。

奥の和室に、家族や友人に体をさすられながら、顔をゆがめるすみゑさんがいた。前夜まで一人でトイレに行けるほどだったが、午前11時ごろから急変したという。

取材していいのかわか、戸惑っている、理絵さんに促された。「ばあちゃん、楽しみにしてたから」。すみゑさんは私たちの訪問の日時を紙に書き、よく見える場所に張っていたらしい。

ベッドのそばに寄り、声を掛けると「自分の体じゃないみたい。元気がでーへん」と返ってきた。

退院を決めた理由を尋ねてみる。「ええ空気が吸いたかった。この自然の風がいい」

和室の窓から見える山も、家の前の田んぼの苗も、緑がいきいきとしている。ちょうど窓から風が入ってきた。すると、すみゑさんが「あー」と声を上げる。

しかし、体調は目に見えて悪くなり、ときに意識がもうろうとなる。

取材を始めて10分後、連絡を受けた看護師が到着し、理絵さんを隣の部屋に呼ぶ。

「血圧が測れない。みんなを

呼んでほしい」

一気に慌たしくなった。理絵さんがすみゑさんに「(孫の)色花が学校から帰ってくるまで、待ってよ」と声を掛け、看護師は「つらいこと、痛いことないからな」と優しく語りかける。



取材を控えようとした私たちに、長男の辰也さんが「聞いたって」と声を掛ける。連日、訪れていた看護師からも「(しゃべって)残さなあかん、と言ってた」と言われる。

「家族に伝えたいことは？」と質問した。すみゑさんは目を閉じ、「はー、はー」と息をしている。「いい家族に恵まれて、おおきに」

ゆつくりと、少しずつ、言葉が刻まれる。

そして、「あるがままに、病気を受け止めようと思ったら...」
「難しかった」。
しばらくおいて、すみゑさんは言った。

「ええ人生やった」

「ご意見、ご感想をお寄せください。手紙は、〒650-8571(住所不要) 神戸新聞編集委員会」のちをめぐる物語係まで。ファクスは078・360・5516へ。メールアドレスは、inochi@kobe-np.co.jp へ。取材させていただくこともありますので、できれば連絡先を記してください。